

祝辭

美知代

アラ、ギ、嬉しいの子、名からして好きヨ  
 足曳の 山のあらゝぎ  
 只一本 つみてもて来て  
 我妹子が 袂に入れし  
 足曳の 山のあらゝぎ  
 今も猶 さやかに匂ふ  
 わな嬉し いまだ我をば忘れ給はじ  
 と、松岡國男の君は謠ひ給ひぬ、之は妾  
 の愛誦な、而してアラ、ギ欄特設の祝  
 辭としたい。

合廻し文(第一回)

アラ、ギ特色の一として、廻し文を初めては如何に  
 この議、同人間に起り候處、氣の揃ひし手合とて、  
 云ひ出すが早いか直に定まり、即時に初めること、  
 致申候、

迄は可かりしが、匆卒の際、氣ばかり焦りて、事中  
 々意に隨ひ不申。

詮方なく——と申しては活地無き咄ながら、事實故  
 致方御座なく——兎に角、第一回に

一、前者の意を受くると受けざるは一に筆者の自由  
 なり

一、議論たるを感想たると寫生たると其他たるとは  
 一に筆者の權内に在り

一、名指して送られたる以上は少なくとも一語以上  
 は必ず謂はざるべからざるは筆者の義務なり、

然れども筆者は強いて長くし又強いて短くする  
 の義務なし

と、云つたような規定にて、不取敢纏め申候

第二回よりは、屹度前者の意を受け、少くとも全篇  
 を通じて動靜血脈の實行せる、極めて斬新奇抜なる  
 書簡文を得たきものと、同一同腕に振をかけ居申  
 候

先ははしがきに添へて天機を漏すこと如斯に御座候

- 伊藤銀月 永井嘯月 高野碧女
- 喜多大象 登羅多樓 筒井草坡
- 鈴木翠嶼 伊藤政女 岡田美知代



今日虫干をして古ひ繪巻を見て居ると、駕籠を擔いで  
 頸を後ろに捻ぢ向けた雲助の尻から煙のやうにスーッ  
 と出た丸いもの、確に尻だ、面白いのは草色が、つた  
 黄色の彩色で、相棒の先生顔を擧めて鼻を摘むに無理  
 は無い、

尻の色

美知代

梅屋の二階

忘れもせぬ、其時雅男さんは一つの茶碗  
 を妾の手に、目を閉ぢ合掌して南無阿彌  
 陀佛、南無阿彌陀佛の聲も打震ひ、さら  
 ばとばかり、お手の茶碗に口をおつけな  
 ざるので、兼て覺悟の妾は、後れじと續  
 きました、兼て覺悟の妾は、後れじと續  
 う、胸は焼ける様に苦しうなつて、膈も  
 何も沸へ返るかの思ひに、雅男さんもさ  
 そと苦痛の中で、そつと目を開いて見ま  
 したの、すると恰度其時、ウ、ウ、ウッ  
 とのけぞつて、堅く噛しばつたお口から  
 は真紅な血汐がたら／＼たら……嗚呼眼  
 に見へるようだわ、見へるやうだけれど  
 も雅男さんは最う其時限り……  
 而して妾は……何と云ふ意氣地なしで  
 御座いませう。草木も眠ると云ふ眞夜中  
 ではありませけれど、四周の静寂な丈け  
 に、聲を立て、は、音をさせては、宿の  
 人々の眠を驚かして此場に駆け込ませぬ  
 とも限らぬ、假にも其様な事が有つて堪  
 るものではありませぬ、戀しい雅男さん  
 に後れて此身獨り、死損ひの見苦しさを  
 人前に曝す等、何うして其様な口惜しい

耻かしい事が忍ばれませうぞ、と心には  
 思ひながら、どうせ此の通りの意氣地な  
 しですもの、四苦八苦遺瀨無の惱に堪へ  
 兼ては、吾乍ら情けない、獸の唸るでも  
 ない、吼へるでもない、一種變な呻き聲  
 が、漏らさじと噛しめた唇を押して出  
 るのです、これではならぬこれでは、と  
 思ひ想つて居りますうち、思ふ事は次第  
 に亂れて、後はそれなりけりの一切夢中  
 (つゞく)